

---

# 狂った日常

藍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂った日常

### 【Nコード】

N5250A

### 【作者名】

藍

### 【あらすじ】

狂った世界で、くだらない日常を過ごした二人。一人は、自分の居場所を求めて、一人は、自分の幸せを求めて。死に魅入られた二人は……

コツ、コツ、コツ。

軽快なリズムを取りながら、私は上へと上った。

午後の授業は、あの嫌味な数学教師だ。

どうせ、義務教育は終わったんだから、無理に授業に出る必要もないだろう。

そう思いながら、階段を上り続けた。

ハア。ハア。

こんなことで息切れをする自分に嫌気がさす。

顔を上げれば、屋上の入り口が見えた。

ドアノブに手をかけ、ゆっくりと回した。

ギイッと、耳障りな音を立ててドアが開いた。

開いた瞬間、ぶわっつと風が私を襲った。長い髪がバサバサと波打って、私の視界が真っ黒に塗り潰された。冷たい風を肌で感じて止むのを待った。少しずつ視界を取り戻しながら、霞んだ世界を見た。

いつもと変わらない風景の中、違和感を見つけた。

柵の向こう側に、人間がいたのだ。

「なにしてんの？」

なんて呑気に質問しながらその方向へ向かった。  
そいつは隣の席の相澤だった。なにかと縁があつて、2年間同じクラスだった。かといって仲が良かった訳でもない。単なる他人と言つてしまえばそれだけのことだ。

「見ててわかんない？」

質問を質問で返された。質問したのは私なんだから答えてくれたつていいじゃない。

「あー。空飛ぶの？ムリムリ、アンタに翼なんか生えてない。」

本当はこんな答えじゃないってわかつてるけど、私は微笑つて相澤に言った。

そうでなかったら良いと願っていたのかもしれない。

「そんな訳ないだろ。どう見ても飛び降りようとしてんだけど。」

「いやね。もしかしたら飛ぼうとしてるかもって可能性もあったからさ。そんな人に自殺するのっていったらかわいそうでしょ。」

呆れた顔で相澤はこつちを見た。

でも、何処か感情が欠落した様な顔だった。何もかも受け入れた顔だった。何もかも諦めた顔だった。これを人間と呼ぶのは相応しいだろうか？

「死ぬの？」

生死なんてさして関係ないかのように問い掛けた。

実際、私達にそんな事どうでもいい。

私たちはもう、死んでいるようなものだから。世界は私たちを受け入れてはくれなかった。

「さあ？ どうだろう。俺はただ、自分の居場所を探しに行くだけだから。死ぬなんてそんなに考えてない。」

「でも、そんな所にいるんだから死ぬんでしょ。」

「かもね。」

「じゃあ、死ねば？」

まるで日常会話かなにかのように、ただ淡々と言葉を紡いだ。

嗚呼。目の前に広がる現実が分からなくなったのはいつだったか。

「一人の人間が死のうとしてるのに、君は止めようとしないのか？」

「止めたってアンタは聞かないくせに。」

間髪いれずに私は言った。

私は無意味なこととはしたくない主義だから。アンタが死んだって私は哀しくなんか無いし、寂しくもない。世界は何も、変わりはない。

「じゃあ、何を待ってるの？」

「君が来るのを待ってた。」

「へえ。」

よく私が此処へ来ると判ったことに感心しながら  
口の端を吊り上げて、さも面白いかのように次の言葉を待った。

「死ぬ前に、ちょっと色々と聞きたいことがあったから、聞いてお  
こうと思って。」

「なあに。」

「この世界にさ、意味なんてあるのかな。」

手前の柵にひじをついて、やる気があるのか無いのか分からない顔  
で言った。

こいつと話をしていると、  
隠し持った感情がばれそうな気がしてならない。

「何を今更。世界に意味なんてあつたら人間なんて生きていけない  
よ。」

世界に意味なんてあつたら、出来損ないの私なんて創らないよ。  
意味が無いから私達は生きていけるんだ。

「じゃあ、生きる意味は必要？」

「さあ。それは人それぞれだと思う。  
でも、ほとんどの人は生きる意味を持っていないよ。」

「そんなものかな。」

他人事のように、何の感情も感じられない声音だった。

否、他人事なのかもしれない。

「俺はさ、生きる意味が分からなくなった。自分の居場所を捜しているうちに生きる意味を無くしてしまった。」

君は、何のために生きてる？」

「私は生きるために死に、死ぬために生きてる。」

「へえ。君に生きる意味があつたんだ。」

相澤は、少し口を引きつらせて嫌味を言った。

笑った顔は無気味に見えてならない。私も、こんな風に見られているのだろうか。

「別に意味ってわけではないけど、よく居るでしょ。生きる意味は皆にある。生きる意味を探すために生きてるって言う人。そんな人に言い訳するために考えてみた。」

私はこの世界では生きていけないから死ぬしかないし、でも、死ぬためには生きないと死ねないから。」

そうでしょう、って皮肉を込めて微笑って見せた。

このどうしようもなく、くだらない世界で生きていく術を生憎私は持っていないから。

誰も、与えてはくれなかったから。

「私もあんと同じで、幸せを探して意味をなくした。」

「失くしても、何故生きる？ 生きていける？  
意味が無いと知って怖くないのか？」

駄々をこねる子供のような双眸で見据えてきた。私はそれを一瞥しただけで、空を見上げた。

何故か、雲ひとつ無い空に無性に嫌気がさした。

「生きる意味が無くつたつて、ヒトは生きていける。意味なんて始めから無かったのに、今更脅えたつて遅いでしょ。」

意味が欲しいなんて、私が言う権利も資格も無い。

私は只、堕ちていくだけ。

深い、深い

孤独の淵へ。

「私に意味なんて要らない。私が幸せだと感じる事ができたら、それだけで生きていける。」

意味なんて求めないから、幸せくらいくれたつて良いじゃない。他は何も望まないからさあ。

ひとつだけでいい  
ひとつだけ。

一瞬だけでもいい。幸せだと呼べるものを与えてよ。

「でもさ、この壊れた世界に幸せなんてあるのかな？  
現に、君は幸せを持っていないだろ。」

しっかりとした口調で、確信を持って相澤は言った。



そう。それは紛れも無い真実で、事実で、否定することが出来ない。  
それでも私は、

「アンタに私の幸せなんて解らないでしょ。

何が幸せで、何が不幸かなんて、自分自身で決めることなんだから。

」

嘘を吐く事でしか生きて行けないんだから、  
これ以上、何も言わないでよ

私は、壊レタク ハ ナイ カ ラ

アンタみたいになりたくない。

アンタみたいに受け入れたくない。

「それでも、君の心は満たされてなんかないよ。満たされてたら、  
こんな所に一人でいないだろう。」

どうしてアンタは、私の中に入ってくるの。いつもいつも、ヒトの  
心を見透かして、  
虫唾が走るわ。

「あははは！！ そうね！ 私は満たされてなんかない。中身なん  
て空っぽだから。何にも入ってなんかかない。」

声を上げて、笑って見せて、全て投げ出した。

どうせ私は、弱い自分が創り上げたかりそめの虚像でしかない。

「それは違う。」

きっぱりと言葉を告げた。

私の顔から表情が消えた。一体何が、

「一体何が、違うというの？」

私の中は空っぽで、どうしようもないくらい不安なのに、なんで？

「どこが違うって言うの？」

何が、何が？

アンタに何が解るって言うの？

「君は満たされてもないが、空っぽでもない。別のもので埋め尽くされているんだ。」

思考静止。理解不能。

アンタの言っていることがさっぱり解らない。嗚呼、私もとうとう完全に壊れてきたかも。

誰でもいいから、この腐敗を止める術を教えてください。

「じゃあ、一体何が私を埋め尽くしているの？」

「君は憎いだろう。この世界が。嫌いで、憎くて、不公平で、理不尽で。どうしようもないだろう。」

そんなの、憎くて当たり前じゃない。

この不公平さを、

この理不尽さを、

全て受け入れろって言うの？

「まあ、その全てを例え受け入れても、何の変わらない。幸せにもなれない。どっちにしてもそんな感情しか待てなかったら幸せには為れない。」

幸せ・・・ねえ。

知っているんだろうな、自分は。

この世界に自分の幸せがないってことに。それでも、それでもソレを求めている自分はもう手遅れ。

「まあ、そうだね。相澤の言う通りかもね。

人間はさあ、最終的には一人なんだよ。孤独からは絶対に逃げることは出来ない。私はそれが怖いんだよ。どうしようもなくて。だから、自分を偽って他人と仲良しごっこに付き合って、幸せだと思いうことしか出来なかったんだよ。」

幸せさえも偽って、私は何がしたかったんだろう。

幸せってそんなに重たい物だったのかなあ。

私の幸せはなんだったのだろう。

何が、欲しかったんだろう。

「幸せが手に入らなかったのに、君は自分の居場所を持っているのか？」

もうそろそろ話が終わるんだな、なんて漠然と考えてみたりして、

探してみた。自分の居場所を。

「在るよ。」

これは私にとっての唯一の真実。  
もし、自分の居場所さえも無かったら、今を生きていくことも出来なかったらう。

「在るよ。 居場所。」

「何処に？」

少し眉を寄せて、納得いかない顔で私を見据えた。

「此処だよ。此処。私の場所が、私の世界が自分の居場所。どんな醜い世界でも、其処でしか私は生きれない。」

「そうか……。」

それだけ言って、相澤は何も言わなくなった。  
其れが何だか虚しくなったけど、それ以外は何も思わなかった。

もう、私に対する質問は終わったのだろう。  
なら、

「私からもさ、質問していい？」

アンタにしか聞くことは無いだろう質問を。

少し驚いたアンタの顔ほど、面白いものはないだろうと思いつながら。

「アンタは、幸せだったの？」

こんな単純で難しい質問を、他人はいとも容易く応えていくんだろ  
うな。

其れが真実でも、偽りでも。

其れがその人の答えなのだから。

「どうだろう。幸せだったのかな？そうだったかも知れないし、そ  
うでなかったのかも知れない。どっちにしろ、俺には意味が無い。」

どうせ

どうせ 私達が求めているものが無かったって、生きていける。  
其れに、変わりはないって事なのかな。 ホント どうでもいい。

「もしかしたら、もしかしたら

君といった場所が、時間が、幸せだったのかもな。」

はあ。

ホント、最後の最後に凄い事ぶっちゃけるな。其れでも、死に行く  
ものかよ。

「君といったら、居場所が出来たかも知れないな。」

「そしたら、私の居場所がなくなっただろうな。他人に邪魔されな  
い世界こそが私の世界なんだから。」

今更、後戻りなんて出来ないんだよ。」

そう、もう何もかも遅いんだ。戻ることなど、許されない。  
永遠など有りはしないんだ。

いずれ人は死ぬ。

只、速いか、遅いかの違いだけ。死から逃げる事は出来ない。

欲望のオマケとして創られた私達は、無理矢理生きることを背負わされて、無理矢理死ぬ定めを背負わされて、無責任なこの世界へと、次々に放り出されるんだ。

確実に、私達は死へと向かっている。

何処かの誰かが言っていた。

自殺することは逃げることなんだよ、と。

私にとっては、自殺も他殺も死ぬことに同じことに変わりは無かった。

でも、

其の人は、この理不尽な世界を、残酷な世の中を、必死で生きていた。もしかしたら、目の前の相澤も必死で生きていたのかもしれない。

「そろそろ、逝くよ。」

もう私を見ていない相澤は、自分の居場所を見つけに行くんだ。これは逃げにいくんじゃないと、私は想った。

「私もすぐ、追いつくと思うよ。」

アンタとは違う場所です。

祈ってるよ、居場所が見つかりますように。幸せになりますように。

口には出さないけど。

「一緒に死にたいなんていうなよ。」

「アンタとなんか死にたくないよ。」

なぜか相澤は、こっちを向いた。

「

」

「えっ？」

又しても、私は風に覆われた。其の向こうで人影が姿を消した。

人は呆気なく死ぬ。消える。忘れられる。

誰かが死んだって、世界は廻り、何も変わらない。いつでも世界は人間をおいて過ぎ去っていく。

人が死んだ。相澤が死んだ。

フェンスの向こうに、血塗れでひしゃげた抜け殻があるんだろう。三歩歩いて立ち止った。私にとって相澤が死のうが生きようが知ったことではない。興味などない。私が今知ることは、相澤が居なくなった世界がどうなったかだ。

どこまでアイツは私の中に根付いているのか。でもどうせ、この感情が揺らぐことはない。何も変わりはないだろう。

後ろを振りかえって、ドアに手をかけた。

相澤の最後の言葉が、蘇った。

どうして最後に、そんな言葉を残すの。私は何もしていない。そんなことを言われる筋合いなんてないじゃない。

ギィと、耳障りな音を立てて、ドアが開いた。私は振り返り、フェンスを見た。

「どういたしまして。」

ボタン、とドアが閉まった。

に。

この声が相澤に届きませんように。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5250a/>

---

狂った日常

2011年1月16日07時07分発行